

『新可笑記』巻一の二「一つの巻物両家にあり」の読み —南北朝正閏争いと「二つの笑い」の内実—

羽 生 紀 子
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

A Study of “Shin Kashoki” 1-2: Controversy Surrounding the Legitimacy between the North and the South Emperor and the Significance of “Two Factors of Humor”

Noriko Hanyu

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

“Shin Kashoki,” published in 1688, is the 16th work of Ihara Saikaku. Previously, this work was not held in high esteem, but some critics have re-evaluated it in recent years.

In a previous paper, I conducted a detailed analysis of “Shin Kashoki” 1-1 and pointed out that its structure has three levels. In this paper, I studied “Shin Kashoki” 1-2. I determined that the pieces of this story newly examine the concrete phase of creation, and I went on to further clarify that the idea of the legitimacy between the North and the South Emperor is superimposed.

From this reading, I examine the meaning of “two factors of humor” of the preface, an idea that has been debated but never fully settled. I conclude that “two factors of humor” is laughter appearing in the second level and caused by the stratified world of the third level. The enthusiasm for Saikaku's attempt at a new creative method has given rise to the declaration of “two factors of humor.”

はじめに

『新可笑記』(元禄元年(一六八八)十一月刊)は、井原西鶴の第十六作目の浮世草子作品である。かつては評価が低く、あまり取り上げられることのなかった作品であったが、近年再評価が試みられている。各章の素材についての新たな指摘もいくつかなされたが、その内容は不十分で、指摘の当否についての検証もなされていないのが現状である。『新可笑記』のすべての章は、いくつかの素材を自在に駆使して創作されており、素材の指摘・検証は、本作の本質をとらえる上で不可欠なものである。

前稿において私は巻一の「理非の命勝負」を取り上げ、従来指摘されていた素材を検証すると共に新たな素材を指摘し、巻一の一にみられる重層性について論じた¹⁾。話に草薙の剣盗難事件が重ねられていること、またその意味を解明し、巻一の二が三層構造を有していることを明らかにした。第一層は故事や伝説・逸話などの素材(従来典拠や素材として指摘されてきた類のもの)、第二層はそれらの素材を自在に駆使して創作した具体的な話、第三層は西鶴の最も描きたかった「重層世界」ということになる。重層世界は、創作の根本的な発想と言えるものである。

本稿では、巻一の二「一つの巻物両家にあり」を検討する。従来取り上げられることの少なかった章で

あるが²⁾、巻一の一と同様に三層構造を読み取ることによって、新しい読みを提出する。具体的には、新たな素材を指摘し、話には南北朝正閏争いが重ねられていることと、その意味について検討する。

あらすじと新たな素材の指摘

巻一の二を、冒頭文と①②③に分けて説明する。まずは詳細なあらすじを示す³⁾。

「義を重んじて命を軽くするは義士の好める所なり」。

①和州信貴は平和に治まっており、城主松永霜台は、「筋目正しく諸浪人を召し抱へ」と触れを出した。侍たちは「先祖の感状、その身の武芸言ひ立て」で、仕官を望んだ。同国の鶯の関近い里から、「楠木正成が末葉」と名乗り、「菊水作りの太刀」と「千剣ちはやにて軍中の連歌」である「咲きかけて勝つ色見する山桜」の自筆詠草を差し上げた侍がいた。また河州国分の里から、全く同じ太刀と詠草を差し上げた侍がいた。真偽を判断しかねて「この道具を預かり置き」、老中が立ち合って詮議となった。「古筆見・刃物の目利きせし人」を呼んで吟味させたところ、一方の侍の詠草は正筆で、太刀は後ごしらえ、もう一方の侍の太刀は楠木の名剣に紛れなく、詠草は移し物と鑑定した。

二人を取り次いだ人は当惑したが、家老は「をどつて評判」し、真偽が簡単にはわかるものでなかったことを理由に、取次いだ者に罪はないとした。その後、松永の殿は力量に応じて二人を召し抱えるように指示した。二人はお目見えも済み、屋敷を頂いてまず広間詰めとなった。家老は大横目三人に対して、二人は大殿の慈悲で召し抱えられたが、「義理を立て」「相果つべき事追つけなり」と予言し、太刀と詠草の噂はしないようにと申し渡した。大横目三人は納得できなかった。

②十日ほどして、召し抱えられることになった二人のうちの一人が、もう一人に「少し内談」と手紙を送る。相手は、身を清め死に装束でやってきた。「同じ二色二人に伝はり、然も違はざるの紛れ物」であったという評判を聞いた。武運の尽き、「兩人共に一分立ち難し」「又の世長く語るべし」「同じ心ざし」と、書置きを残し、「二人刺し違へて」死んだ。その「筆跡」には、家に伝わる「筆・刀」のおかげで仕官できたが、その「筆・刀」の真偽がはっきりしないことがわかった。「ああ語るときん則ば、先祖の屍を汚す。言はざる則ば、士を売るの罪遁がれ難し」とあった。国主を始め人々はこの「筆跡」を感じ、二人の死を惜しんだ。

③その後家老は、二人は潔いが、兩人とも楠木の子孫ではないだろう。今時の巧み恐ろしき商人が、それぞれ「正銘」と後ごしらえ、「正筆」と写し物を作って売り渡したのだろうと言った。この話を伝え聞いた水分すいぶんというところの地侍の何某が、「代々楠が釣書、家に伝へし武道具の目録」を持参し、例の二色は「私の親、修復のために奈良に遣はし」ていたものであるが、その職人が取って逃げ、行方がわからなくなっていたという。詮議して太刀と詠草は地侍に返してやった。「国主にありたきは良き家老ぞかし」。

『新可笑記』の創作方法は、いくつかの素材を駆使することによって、本話を構成するというものである。その意味では、本話の内容の検討は、素材の指摘から始める必要がある。これまで巻一の二の素材としては、楠木正行兄弟の刺し違えを踏まえるかという部分的なものの以外⁴⁾、全く指摘されてこなかった。それは巻一の二が注目されなかったこともあるが、指摘することが困難なのではなく、素材・本話・重層世界という『新可笑記』の三層構造に気付かず、本話の検討に終始したからであるといえる。

素材の指摘自体は困難なものではないと言ったが、それは西鶴が、前後の章を関連させて創作しており、前章との繋がりが、素材の指摘のみならず、重層世界・創作主題の理解までも容易にしているからである。素材や重層世界を示すシグナルが本話に嵌め込まれているのである。

巻一の二と前章巻一の一との関連は、表面的には、橋の正連と胡蝶・菊若という兄弟同然の二人が楠木正成の末葉を名乗る侍二人へと、草薙の剣は菊水作りの太刀へと展開する。しかし前章で重要なのは、草薙の剣盗難事件と、その草薙の剣の存在の根源的な問題であった。前章を読めば、草薙の剣を含めて三種の神器に思いを馳せることになる。特に草薙の剣については、次のような周知の伝説的逸話を思い浮かべるであろう。

- (1)素盞烏尊が八岐蛇^{やまたのおろち}の尾の中から取り出した。天照大神がかつて高天原から落とした物であった。
- (2)崇神天皇が剣と鏡^{かたしろ}の形代^{みまもり}を作らせて、護身とした。
- (3)日本武尊が東国征伐の際に、景行天皇から託された。
- (4)天智天皇七年に盗難に遭った。天武天皇朱鳥元年、熱田神宮へ送った。
- (5)元暦の頃、安徳天皇とともに西海に沈んだ(八岐蛇＝安徳天皇が龍宮へ取り返した)。
- (6)伊勢の国より、海から出現した宝剣が進奏される。
- (7)後南朝の禁闕の変で奪われるが、清水寺で見つかる。

三種の神器や草薙の剣の一般的な知識を持つ読者が、前章巻一の一の、侍が盗んだ五百両のうち百五十両を使い、残り三百五十両は泉水の岩組の根にあると白状した最後の部分を読めば、(2)により草薙の剣に本体と形代のあることが踏まえられていること、さらに(1)(5)(6)を繋いで、剣を奪われた八岐蛇が安徳天皇となり、剣を龍宮へ奪い返したが、その剣の本体が伊勢の海から出現して、宮中(熱田神宮)へ送られたことを想起することも可能である。読者は(1)から(6)のすべてを含む『太平記』巻第二十五「宝剣進奏両卿意見の事」「三種の神器来由の事」「黄梁午炊の夢の事」に到達するのではないだろうか⁵⁾。

本話そのものにも素材を想起させるいくつかのシグナルがある。差し上げられたものの真偽の判断という問題は、『太平記』の三説話と共通するが、シグナルというのはそのような全体的な類似とは異なり、読者の違和感を誘い、素材に到達させようとするものである。

あらすじ①の部分では、楠木正成の末葉と名乗る浪人が差し上げた伝来の品に注目させられる。「菊水作りの太刀」は菊水紋のある太刀であろう。正成は建武の新政の功績で後醍醐天皇から菊紋を下賜されたが、そのまま用いるのは恐れ多いと、信奉する水分神社^{みくまり}の流水紋と合わせた菊水紋を創ったとされている。水に浮かぶ菊半分というのは、天皇家の二つの流れ、南北朝を嵌め込んでいるかのようである。本話の重層世界である南北朝正閏争いを想起させるが、「正閏」(正しい系統とそうでない系統ということであるが、ある意味どちらも正統であるともいえる)ということで、太刀の真贋の判定が困難だという「宝剣進奏両卿意見の事」を示唆するものでもある。

「千剣^{ちはや}にて軍中の連歌」は、『太平記』巻第七「千剣破城軍事^{ちはやのいくさ}」(慶長八年刊の古活字本の章題)を受けているのであろう。一般的には「千早」なのだが、「千剣破」とされているものを、さらに「千剣」としたわけで、何かに気付かせようとするものといえる。「三種の神器来由の事」には、素盞烏尊が大和宇多野に一千の剣を立て並べた城郭を備えて立て籠もったところ、天照大神が磐戸から出て、八百万の神を遣わし、千の剣を蹴破ったと言う。「これよりして千剣破神^{ちはやぶる}とは申しつづくるにや」とある。西鶴が「千剣」としたのは、この「千剣」の説話のある「三種の神器来由の事」が素材であることに示唆するためのもののであろう。

「咲きかけて勝つ色見する山桜」は、事実としては正成詠の発句ではない。千早城を取り囲んだ寄せ手が一万句の連歌遊びをしたが、その時の長崎九郎左衛門の発句で、工藤二郎左衛門が「嵐や花のかたきなるらん」と脇を付けたものである。著名な逸話であり、正成の発句でないのは周知のことであろうが、正成詠とすることで、勝利を確信していたのは正成ということになる。元のやりとりでは発句の「山桜(花)」は寄せ手、脇句の「嵐」は楠木で、自分たちを散る花にたとえてしまうという寄せ手にとっては不吉なものであった。その意味で、そもそもこの発句は正成にこそふさわしいといえる。

いずれにしても、西鶴がそれを正成「自筆の詠草」としたのは、読者に違和感、不審感を抱かせるものであった。三種の神器のうち、神剣と神鏡は形代が作られていた。浪人二人が差し上げた「自筆の詠草」は、神鏡を当て込んでいるのであろう。続く真偽の判定で、一方の「連歌懐紙は移し物」と極められる。後文では家老に「筆の物を写し」と表現させている。鏡を想起させ、「三種の神器来由の事」が素材であることに気付かせるための表現といえる。家老が「相果つべき事追つ付けなり」と、侍二人の刺し違えを予言しているが、それは朝敵とされた楠木氏への誅罰のことを匂わしているのであろう。

②については、家老の予言を受けた形で、侍二人は「又の世長く語るべし」「同じ心ざし」と、「二人刺し違へて」書置きを残して果てる。これは、『太平記』巻第十六「楠正成兄弟以下湊川にて自害の事」に見える、正季が「七生までも同じ人間に生れて、朝敵を亡ぼさばや」と答え、正成が心から嬉しそうに「同

じく生を替へて、この本懷を遂げん」と刺し違えて果てたところを想起させる。書置きを「筆跡」とし、「筆跡を感じ」と繰り返して「筆跡」が強調されるのは、楠木正虎による楠木氏の朝敵赦免の勅許を願う逸話を想起させるものである。正虎が世尊寺流の一流の書家であったことを嵌め込んでいるのであろう。①にことさらに松永霜台の名があげられるのは、正虎との関わりを想起させるものである。

③については、家老の言い分からは、「黄梁午炊の夢の事」を連想させる。②の正虎の筆跡から、水分の地侍の出現へ展開し、「私の親、修復のために奈良に遣はし」というところは、後南朝の楠木正秀らによる禁闕の変を想起させるものである。

素材との対比

西鶴が本話に嵌め込んだ素材を示すさまざまなシグナルを読み取ることによって、新たに指摘できた素材は多かった。次に本話とそれらの新たな素材を具体的に比較する。

①の浪人二人が太刀と詠草を差し上げ、真偽の判定が問題となるところは、『太平記』卷第二十五「宝剣進奏両卿意見の事」「三種の神器来由の事」を下敷きにしている。家老の侍二人の死の予言は、楠木氏が朝敵とされた逸話である。

【宝剣進奏】伊勢の国で、円成法師は海から「三鈷柄の剣なんどの形」を手に入れる。大神宮の前で、童部に天照大神が乗り移り、承久以来、武家のために天威を失っているのは、宝剣がないゆえだ。「故に百王鎮護の宗廟の神、勅を竜宮に下されて、元暦の古西海に安徳天王の沈み失せ玉ひし宝剣を召し出ださるるところなり」、「この宝剣を進奏すべし」と託宣した。そこで円成は、日野大納言資明卿に宝剣を差し上げた。資明卿は事の実否をただした上で奏聞しようと、宝剣は紫宸殿の南庭に奉安する春日大社の神殿に納めた。そして神祇大副兼員を呼び、三種の神器の来由を尋ねる。

【三種の神器来由】兼員は三種の神器の来由を語り、「崇神天皇の御宇に、石凝姥神の裔、天目一箇神の裔、二氏の神の剣と鏡とを鑄替へて、天子の肩の護身となし玉ふ」と形代に触れる。資明卿は、「暫く御辺の許に預り奉るべし。何なる不思議をも一つ祈り出されよ」と言う。兼員は三七日の祈誓をし、その間に霊夢があれば奏聞するようにと約束した。祈誓の満ちる日、足利左兵衛督直義の夢に奇瑞があった。直義がふと現れた勧修寺大納言経頭卿に何かと尋ねると、「今日伊勢より宝剣を進らす」儀式だと答えたという。そこで日野大納言資明卿は奏聞し、法印は褒賞を与えられた。

経頭卿は、「一向資明卿が阿党」によるもので、資明卿を「佞臣」と糾弾した。八岐蛇が安徳天王となって宝剣を竜宮へ取っていったもので、百六十年余出現しなかったのに出現するはずがないと、宝剣であることを否定した。自分自身が直義の夢に現れた奇瑞を否定し、直義の夢を信用しては天下の嘲りを受けると言った。

【楠木氏が朝敵とされた逸話】永享元年(一四二九)、楠木光正が將軍義教暗殺を企てたが捕らえられ斬首された。永享九年、楠木兄弟が畠山持国に討ち取られた。このことを『看聞御記』は、「天下の為に珍重」「大慶珍重極りなし」としている。寛正元年(一四六一)、楠木某が幕府に捕らえられ処刑されたが、『碧山日録』には次のように記す。

楠木氏、往昔天下兵馬の権を領し、人の頭を斬ること幾万級を知らず。強半は無辜の民を戮殺し、潰亡の後、其の遺孽官に獲らるる者、咸刑官の手に死す。これ積悪の報なり。悲しむべきなり。

②の素材は、『太平記』卷第十六「楠正成兄弟以下湊川にて自害の事」、卷第二十五「秦の繆公敵の囲みを出づる事」である。

【楠木正成・正季自害】楠木正成は左兵衛督直義軍と激戦、舎弟正季は正成の問いに対して、「七生までも同じ人間に生れて、朝敵を亡ばさばや」と答えた。正成は心から嬉しそうに「同じく生を替へて、この本懷を遂げん」と刺し違えて果てた。「死を善道に守る者は、古より今に至るまで、この正成程の者はなかりつる」と評される。新田義貞も同じ時の合戦で、「命を鴻毛よりも軽くし、義を金石に比して戦ひたり」と描かれる。

【正行・正時自害(秦の繆公敵の囲みを出づる事)】師直軍と激戦、正行・正時兄弟も潔く果てた(慶長八年古活字版『太平記』では刺し違えて果てる)。「命を君臣二代の義に留め、名を古今無双の功に遺しぬ」。

③の素材は、『太平記』巻第二十五「黄梁午炊の夢の事」、後南朝の楠木正秀らによる禁闕の変、楠木正虎による楠木氏の朝敵赦免の勅許の逸話である。

【黄梁午炊の夢】勸修寺大納言経顕卿は、夢の話は「如夢幻泡影」のようなものだ。中でも「黄梁午炊」の盧生が邯鄲の旅館で黄梁を炊くほどの短い時間に、出世の栄華を極める夢を見た故事は、そのはかなさの典型だ。宝剣だというのは夢の中のことから、院宣を取りやめるようにと申し上げ、その通りにおさまった。

【禁闕の変】建武三年(一三三六)後醍醐天皇により開かれた南朝(大覚寺統)は、明德三年(一三九二)の和約で名目上解消された。その後も南朝の後胤を擁する後南朝勢力は、反幕府勢力とも関係して活動が続ける。北朝(持明院統)側では後小松天皇の直系が断絶して、伏見宮家から後花園天皇が迎えられる。また六代將軍足利義教暗殺という嘉吉の乱の混乱もあり、嘉吉三年(一四四三)九月二十三日に、禁闕の変が起こる。首謀者は、南朝の通蔵主・金蔵主の兄弟、源尊秀、日野有光、資親、実行部隊は楠木正秀に率いられた楠木氏・和田氏であった。数百人で内裏を襲撃して火をかけ、三種の神器の剣と神璽を奪って比叡山に逃れたが、朝廷から凶徒追討令が出ると、二十六日には鎮圧された。奪われた神器のうち、剣は清水寺で発見され戻されたが、神璽は持ち去られた。神爾は長禄元年(一四五七)赤松氏の遺臣が後南朝より奪い返し、北朝の手に戻っている⁶⁾。

【楠木正虎と朝敵赦免】楠木正虎の系図上の父は、禁闕の変を起こした楠木正秀の子という河内大饗^{おおあえ}氏の大饗正盛と言われる。正虎は正盛の養子に入って楠長譜^{ちやうあん}と名乗り、松永・織田・豊臣家の右筆を務め、永禄二年(一五六九)に楠木正成の子孫と称し正成の朝敵としての赦免を嘆願した。松永久秀の取り成しで正親町天皇の勅免を受け、正式に楠木正虎と改名したという。書は世尊寺流の一流の書家であった。松永久秀の取り成しのところは、織田信長、あるいは織田信孝と松永久秀とする異伝もある。この時の正親町天皇の綸旨は次のようなものである⁷⁾。

建武の比、先祖正成朝敵たるに依り、勅勘せられ、一流已に沈淪し訖ぬ。然れども今其の苗裔として先非を悔い、恩免の事歎き申し入るゝの旨聞し食さるゝものなり。弥奉公の忠功を抽んづべき由、天氣かくの如し。これを悉くせ、以て状す。(永禄二年十一月廿日／右中弁(花押)／楠河内守殿)

本話の解釈と重層世界

本話と素材を見比べると、素材の大枠を取り入れながら、省略したり新たな要素を付加したりしていることに気付く。①の本話の構成と、素材の構成を比較する。

(1)城主松永霜台は、「筋目正しく諸浪人」を募る。

天照大神が乗り移り、宝剣を進奏するように託宣する。

(2)「楠木正成が末葉」と名乗る二人が、剣と詠草を差し上げた。

円成法師は、日野大納言資明卿に宝剣を差し上げた。

(3)真偽を判断しかねて、道具を預け、詮議となった。

資明卿は実否をただそうと、宝剣を紫宸殿の南庭に奉安する春日大社の神殿に納め、神祇大副兼員を呼び、三種の神器の来由を尋ねる。

(4)「古筆見・刃物の目利きせし人」に吟味させる。詠草は正筆と移し物、太刀は正銘と後ごしらえと判明する。

兼員は三七日の祈誓、足利左兵衛督直義の夢に奇瑞があり、宝剣と判明する。

(5)二人を取り次いだ人は当惑したが、家老は「をどつて評判」し、取り次いだ人は別条なしとする。

松永の殿は力量に応じて二人を召し抱えるように指示した。二人は広間詰めとなった。家老は、

二人は「義理を立て」死ぬことになると言する。

勸修寺大納言経頭卿は、資明卿を佞臣と決めつけ、百六十年余出現しなかったのに出現するはずがないと、宝剣であることを否定した。直義の夢を信用しては天下の嘲りを受けると言った。

本話と素材の対応は明らかであるが、大きな相違の一つは、(2)円成の宝剣進奏を、二人の侍がそれぞれ剣と詠草を差し上げたとしたところである。一本の宝剣の真偽から、二本の刀と二つの詠草としたことは、単なる真偽の判断ではなく、どちらが正しいのかという問題に変化させているのである。(4)において、直義の夢の奇瑞によって宝剣と判定するが、古筆見は、詠草は正筆と移し物、目利きは、太刀は正銘と後ごしらえと判定する。三種の神器の神鏡と神剣の本体と形代の問題を重ねていることがわかる。ここまででは、松永霜台や楠木正成の末葉とあることを含めて、何か違和感を抱くに違いないが、西鶴が本話に南北朝正閏争いを重ねていることまで想起するのは難しいかもしれない。

二つ目の大きな相違が(5)にみられる。素材では、日野大納言資明卿と勸修寺大納言経頭卿の争いとなり、経頭卿が資明卿を佞臣と非難し、宝剣であることを否定している。宝剣を差し上げた円成は、資明卿の一味とみなされている。それに対して本話では、家老は「をどつて評判」し、取り次いだ人は別条なしとする。家老が積極的に評判する最初が、取り次ぎの人、すなわち資明卿を別条なしとすることであることには違和感を覚える。対決の相手を、円成にあたる楠木の末葉を名乗る二人の浪人に変えているのである。

この改変は、楠木氏が朝敵とされていた逸話を踏まえるものであろう。楠木正成は南北朝の争いの中で朝敵とされたもので、その末葉を名乗る二人の侍は、捕らえられた状況にあるといっている。『太平記』巻第二十五「宝剣進奏両卿意見の事」「三種の神器来由の事」に、南北朝の争いを付加したものといえる。経頭卿と資明卿は共に北朝の重鎮であった。直義も北朝方である。家老が取り次ぎの人を別条なしとしたのは、北朝同士の経頭卿と資明卿の争いを、北朝の経頭卿と円成、すなわち南朝の楠木の末裔を名乗る二人の浪人に変えたわけで、南北朝の争いに気づかせるためのものである。二人の浪人について「義理を立て」「相果つべき事追つ付けなり」と予言したのは、二人が本当の楠木の末葉ではないのに、正成兄弟の刺し違えまで偽装すると言っているのである。(5)に南北朝の争いが付加されていると気付くと、剣と詠草の真贋の問題は、本体と形代と置き換えられ、南北朝正閏争いという重層世界へ到達することになる。

南北朝正閏争いとは、次のようなものである。

南朝(大覚寺統)と北朝(持明院統)はどちらかが偽というのではなく、正閏の関係にある。南朝方の重鎮であった北畠親房の『神皇正統記』は南朝正統論、足利氏に関わりの深い武将、または室町幕府関係者の著とされる『梅松論』は北朝正統論に立つ。明德三年(一三九二)の和約で、北朝によって皇統が統一され、北朝正統が中心となるが、足利幕府が衰えて『太平記』が流布され、南朝方に対する同情的な見方も出現するようになる。永禄二年(一五六九)の楠木正成の朝敵赦免などもあり、なかでも楠木氏と同様南朝方であった新田氏の末裔と名乗った徳川氏が政権を取ったことも状況に変化をもたらした。

②の本話の構成と素材の構成についての検討に移る。

(1)侍の一人が「少し御内談」と手紙を送ると、相手は身を清め死に装束でやってくる。

正成・正季兄弟、正行・正時兄弟は刺し違えの覚悟を固めている。

(2)「同じ二色二人に伝はりて、然も違はざるの紛れ物」だという評判を聞いた。「取り次ぎせられし人、内証申されぬも恨むべからず」と、「二人刺し違へて」果てる。

楠木光正が捕らえられ斬首された。楠木兄弟が畠山持国に討ち取られた。楠木某が幕府に捕らえられ処刑されたことなど。

(3)書置きには、差し上げた「筆・刀亦分明ならず」「ああ語る則ば、先祖の屍を汚す。言はざる則ば、士を売の罪遁がれ難し」とあった。人々はこの「筆跡」を感じ、二人の死を惜しんだ。

楠木正虎の朝敵赦免の嘆願。

(1)の楠木兄弟の覚悟は南朝への義を貫くためのものであったが、末葉を名乗る二人の覚悟は捕縛さ

れた中での先祖への義を貫くためのものである。侍二人には、汚名を晴らそうとする楠木一族の強い願いが感じられる。

(2)に「取り次ぎせられし人、内証申されぬも恨むべからず」とある。侍二人は伝来の品を差し上げて仕官を願った。「取り次ぎせられし人」との間にはどのようなことが約束されていたのであろうか。松永霜台に取り次ぐわけで、松永霜台は「親類書に及ばず、その器量によつて」と仕官を認めている。松永霜台は楠木正虎の赦免願をとりなした人物であった。そのことを考慮すると、取り次ぎ者との間には二人が楠木一族であることは了解されていたことなのであろう。しかし取り次ぎ者からは何の説明もなく、家老は、殿の意向や取り次ぎ者の思惑を無視して二人を処刑した(刺し違えさせた)のである。二人には無念の思いがあったと言える。その思いを書置きに残し刺し違えたが、その「筆跡」は正虎に劣らず見事なものであった。本来であれば二人は仕官が叶って勤めを果たす(朝敵赦免を受ける)べきであったのであり、そのことから、人々は二人の死を惜しんだのである。

(3)の「ああ語る則ば、先祖の屍を汚す。言はざる則ば、士を売るの罪遁がれ難し」の「語る」というのは、伝来の品の正しさを語るものであろう。それは正閏ということに関わり、先祖は南朝に義を貫いたが、朝敵とされた。今、先祖同様無実であるにも関わらず朝敵として処刑されれば、先祖の不名誉の上にさらに不名誉を重ねることになる。しかし、本物だと言わなければ、偽物で禄を貪ることになり、武士でなくなる。死ぬ以外にないということなのである。

③の本話の構成と素材の構成について検討に移る。

(1)その後家老は、二人は潔いが、兩人とも楠木の子孫ではない。今時は巧み恐ろしき商人が、「正筆正銘」であったものの偽物を作り、それぞれに本物と偽物を売り渡したのだらうといった。「かの者ども先祖に心憎き所あり」という。

勧修寺大納言経頭卿は、宝剣だというのは、夢のような話だから、院宣を取りやめるように申し上げ、その通りにおさまった。

(2)水分と言うところの地侍が、「代々楠が釣書、家に伝へし武道具の目録」を持参してきて、例の二色は、「私の親、修復のために奈良に遣はし」ていたが、その職人が取って逃げ、行方がわからなくなっていたものだという。願い通りに返却。

楠木正秀らの禁闕の変と正虎の朝敵赦免の嘆願のこと。

(3)「国主にありたきは良き家老ぞかし」。

勧修寺大納言経頭卿のその後。

家老はあくまで本物であることを否定し、今時の商人の企みだと推測する。素材で経頭卿が宝剣をあくまで否定するのと同じである。ただ家老は、二人の侍が見事に刺し違えて果てたことから「先祖に心憎き所あり」と言わざるをえない。(2)水分の地侍とあるが、楠木氏の信奉する水分神社のある千早赤坂村からの正統な子孫として登場させているのである。「奈良」は吉野の南朝を匂わせたもので、三種の神器の神璽を奪った禁闕の変を関わらせ、本体と形代、南北朝正閏を嵌め込んでいる。正虎の朝敵赦免の嘆願がかない、朝敵を勅許されたのである。(3)に「国主にありたきは良き家老ぞかし」とあるが、この家老は良き家老であったのだろうか。そうではなく、「ありたきは良き家老」なのである。宝剣や菊水作りの太刀、詠草を、南北朝正閏の問題と絡ませているということから、太刀と詠草は偽物ではない。とすると一貫して偽物として否定し続けた家老、すなわち勧修寺大納言経頭卿のその後はどうなるのだろうか。『太平記』の南都本系諸本・前田家本には、「黄梁午炊の夢の事」に続けて、次の行文がある。

宝剣ヲ申破ラレスハ、天下ノ御宝トシテ安穩ニモヤ有ヘカラン、無レ驗申失ハンスル事、冥鑑モ何トソ覚ケル、是ニ依テ経頭卿資明卿弥御中悪ク成テ、不義ノ諫言ヲモ入ラレケリ、サレハ坊城殿ハ彼御罪ニヤ、毎日弊衰シ給ヒ、日野殿ハ今ニ至マテ一門繁盛シテ、美麗ヲ壮ニシ給フ者也。惣テ神明ノ御事ハ偽ニモ人啖申マシキ事ナリケリト、信感ヲ至サヌ者ソ無リケル。

坊城殿(勧修寺家)は没落し、日野家は繁栄したという。つまり家老の判断は誤っていたのであり、よき家老などではなかったということなのである。

冒頭部分の解釈と主題の吟味

巻一の二は、冒頭に「義を重んじて命を軽くするは義士の好める所なり」とある。これについて、次のような注が付されている。

諺に「命は義によりて軽し」（職人尽歌合など）という。なおこの原拠は「情為恩使、命縁義軽」（後漢書、朱穆伝）。また諺に「義は泰山より重く、命は鴻毛より軽し」ともいう。（『決定版対訳西鶴全集』注）

「義を重んじ、命を軽くし、名を後の世に残し置く」（幸若舞・満仲）（『新編日本古典文学全集』頭注）語句の類似からいうと、西鶴はおそらく幸若舞『満仲』によったのであろう。しかし、義と命の軽重についての文章は、諺にみるように人口に膾炙していた。そのような義と命についての文章を冒頭に置くのは、素材にその契機がある。

『太平記』巻第十六「楠正成兄弟以下湊川にて自害の事」で、正成の問いに正季は「七生までも同じ人間に生れて、朝敵を亡ぼさばや」と答え、正成は「同じく生を替へて、この本懐を遂げん」と刺し違えて果てた。「死を善道に守る者は、古より今に至るまで、この正成程の者はなかりつる」と評される。さらに正行・正時兄弟も、巻第二十五「秦の繆公敵の囲みを出づる事」で、「命を君臣二代の義に留め、名を古今無双の功に遺しぬ」と評される。正成と同じ合戦で、新田義貞も、「命を鴻毛よりも軽くし、義を金石に比して戦ひたり」と描かれる。『太平記』巻第十「新田殿義兵を挙ぐる事」で、義貞の舎弟脇谷義助は「弓矢の道、死を軽んじて名を重んずるを以て義とせり」と言う。

以上のような義を重んじ、命を軽んじる考えは、「七生までも同じ人間に生れて、朝敵を亡ぼさばや」「この本懐を遂げん」にみるように、南朝への忠義そのものである。それを「善道」としているのである。「君臣二代の義」は、後醍醐天皇と後村上天皇、正成と正行の親子二代を指すもので、義貞・義助の義も同様に解釈できる。しかし素材からは、「名を古今無双の功に遺しぬ」という、名を遺すことが省かれている。冒頭文が『満仲』の文を踏まえているとすれば、「名を後の世に残し置く」から「義士の好める所」へ変えられたことになる。いわば、『満仲』とは異なり、個人的な名誉は否定しているのである。

ところで『満仲』の義は、主君のために我が子を犠牲にするものである。平林香織氏は、主君のために我が子を犠牲にするという究極の義と忠が描かれているとし、本話の侍二人が自分を恥じて死ぬ態度とは異なるとする。我が子を犠牲にするのは究極の義とはいえず自己満足の義でしかない。「義士の好める所」は「性分に合うものを選び取って味わう意」で「選択する」嗜好性に重点を置いているという⁸⁾。しかし先述したように、侍二人は自分を恥じて死んだのではなかった。「好む」は必ずしも嗜好性を意味するものではない。選択とは、自己の信条に従うものを選び取ることでもある。西鶴が「義士の好める所なり」としたのは、正成たちの自己の信条に従った生き方を指したものであろう。南朝方への好意的な風潮というのは、北朝方はすでに評価されていたが、南北朝を正閏の視点から見直せば南朝も正しく、南朝に忠義を尽くした人々も評価されるべきだということになる。

南北朝いづれであっても、日本の神国としての象徴である朝廷をいただき、義を重んじる存在として武士を位置づけたものである。目録副題「武士は義理死世に惜しむ事」は、素材の楠木兄弟の刺し違えを踏まえて、楠木正成の末葉を名乗る侍二人の刺し違えを惜しんだことを指している。義・義理を重んじて、そのために命をかけるというのが本当の武士で、名を遺すことなどは問題ではないと主張している。本章では、南北朝正閏争いを通じて、武士は義ある存在であると、その存在のあり方を敬重しているのである。政道批判や武士批判⁹⁾を読み取ることはできない。

序文「二つの笑い」の意味

『新可笑記』の序文は次の通りである。

笑ふにふたつあり。人は虚実の入れ物。明け暮れ世間の慰み草を集めて眺めし中に、昔淀の川水を硯に移して、人の見るために道理を書き続け、これを『可笑記』として残されし。誰か笑ふべき物に

はあらず。この題号を借りて、新たに笑はるる合点、我から腹を抱へて、知恵袋の小さき事、生れ付きて是非なし。

冒頭の「笑ふにふたつあり」にいう「二つの笑い」については、これまでも取り上げられてきた。続く行文「人は虚実の入れ物」、あるいは仮名草子『可笑記』との関わりで論じられることが多く、代表的なものとしては篠原進氏¹⁰⁾、仲沙織氏¹¹⁾の論考が挙げられる。ここでその詳細に触れることはできないが、二つの笑いは、『新可笑記』創作方法と関わりと考えられる。

西鶴は自己の作品である『新可笑記』について、「新たに笑はるる合点」というように、笑われる対象であると言明しているが、「知恵袋の小さき事」ゆえ、新たな笑いが提供できるだろうかと、若干の危惧を表明している。その危惧は、西鶴が『新可笑記』において、新しい創作方法を試みたことによるものであろう。その方法は、故事や伝説・逸話などの素材を第一層とし、それを自在に駆使して創作した具体的な話を第二層、さらに最も描きたかった「重層世界」を第三層として重ねるというものであった。西鶴が殊更に「新たに笑はるる合点」と強調したのは、各章を三層構造にするという新しい創作方法を試みたからであろう。ということは、新しい第三層の重層世界のもたらす笑いが、「新たに笑はるる合点」の一つの笑いということになる。虚実でいうならば実の笑いにあたるのだろう。

もう一つの笑いは、『新可笑記』の具体的な本話のもたらす笑いである。『新可笑記』において、西鶴は素材を駆使して各話を創作することに相当こだわっている。素材の利用自体はそれまでもみられる方法であるが、ここまでのこだわりをみせたことはなく、その換骨奪胎の妙は見事である。虚実でいえば虚の笑いということになろう。西鶴がわざわざ序文の冒頭に「笑ふにふたつあり」と宣言したのは、それまでと異なった新しい創作方法を試みる気負った意気込みがあったからではないだろうか。

その意気込みからは、作品の創作方法に関わる二つの笑いとは違った次元での、読者への挑戦も感じられる。「知恵袋の小さき事、生れ付きて是非なし」と、自分の作意を浅知恵のように卑下しているが、読者がその浅知恵を見抜けなくて笑えないのなら、笑うのは作者の私なのだということである。ここにも「二つの笑い」が重ねられているのである。

注

- 1) 羽生紀子「『新可笑記』の重層性―巻頭章と草薙の剣盗難事件―」と題して別稿予定。
- 2) 広嶋進氏、平林香織氏に論考がある。広嶋進「『新可笑記』の「道理」と政道批判―『可笑記』『太平記』との関わり」（『西鶴新解』二〇〇九年、ペリかん社、初出・『江戸文学』第二三号、二〇〇一年六月）。平林香織「『新可笑記』巻一の二「一つの巻物両家にあり」論」（『長野県短期大学紀要』第六四号、二〇〇九年一月）
- 3) 以下、『新可笑記』本文は「新編日本古典文学全集」（広嶋進校注・訳）による。
- 4) 「新編日本古典文学全集」の頭注に、正成の長男正行と弟の刺し違えを踏まえたものかとの指摘がある。
- 5) 以下、『太平記』本文は「新編日本古典文学全集」（長谷川端校注・訳）による。
- 6) 『十津河記』四、『続神皇正統記』など。渡辺大門『奪われた「三種の神器」』（講談社、二〇〇九年）
- 7) 村田正志『南北朝論』（「日本歴史新書」至文堂、一九五九年）
- 8) 平林氏前掲論文（注2）
- 9) 広嶋氏前掲論文（注2）
- 10) 篠原進「二つの笑い―『新可笑記』と寓言―」（『国語と国文学』第八十五巻第六号、二〇〇八年六月）。
- 11) 仲沙織「『新可笑記』における〈眼〉の機能」（『待兼山論叢』第五十号、二〇一六年十二月）

受稿日 2018年9月21日 受理日 2018年11月26日